

論文

近代の中国語訳聖書の系譜に関する覚書き

—バセの『四史攸編』を中心に—

塩山 正純

要 旨

プロテスタント宣教師が中国大陆で聖書の中国語訳を開始したのは19世紀の初頭で、モリソンによる『神天聖書』がその嚆矢である。同じ時期にマーシュマンもインドで所謂『聖經』の中国語訳を完成した。モリソンとマーシュマンはいずれも聖書の中国語訳に際し、これを遡ること100有余年の中国語訳聖書稿本を参考にしたと言われる。この稿本とはフランスのラザリスト会宣教師のバセによる所謂『四史攸編』である。『四史攸編』に関しては、以前は大英図書館所蔵本を除いては、その他の稿本の存在は知られていなかったが、最近のこの方面の研究の進展によって、この大英図書館所蔵本より早い時期の稿本が2つ発見された。1つはローマのカソリック系の図書館所蔵のもので、もう1つはケンブリッジ大学図書館に所蔵されている。幸いにして、筆者は大英、ローマ、ケンブリッジの3つの稿本を調査する機会を得て、これらの翻訳上の異同を考察した。また、『四史攸編』以前、17世紀のカソリックにはさらに『聖經直解』という聖書の中国語への抄訳を含む教本がある。本稿は『聖經直解』と『四史攸編』の3つの稿本における中国語訳文の特徴の分析を通して、プロテスタント宣教師の翻訳（『神天聖書』と『聖經』）以前の中国語訳聖書の翻訳上の継承関係について予測を試みるものであるⁱ。

キーワード：中国語訳聖書、バセ、四史攸編、聖經直解、神天聖書、聖經

0. はじめに

中国本土における新旧約聖書全文の中国語訳は、ロバート・モリソンによる所謂『神天聖書』(1814–1823)をその嚆矢とするⁱⁱ。また、ほぼ同時期には、インドのセランポールで、ジョシュア・マーシュマンによって所謂『聖經』(1815–1822)が翻訳された。この2つの聖書から時代を遡ること100有余年、18世紀初頭に翻訳され、モリソンが聖書翻訳の際に参照したと言われる一連の稿本があり、モリソン、マーシュマンもそれぞれこの稿本を参考しつつ翻訳を完成させたと言われている。この手稿本とは、フランスのラザリスト会宣教師のジャン・バセによる所謂『四史攷編』(18世紀初頭、以下『四史攷編』)である。

バセ訳『四史攷編』と言えば、大英図書館に所蔵される稿本(大英所蔵本)の存在しか明らかになっていなかったために、これまでの研究は自ずとこの大英所蔵の稿本を指した。最近になって相次いでこれに先行する2つの稿本の存在が明らかにされた。まず、北京外国語大学の張西平教授によってローマのカサナテンス図書館に所蔵される稿本(ローマ本)の存在が明らかにされ、内田 2010 によってそのあらましが紹介された。ちなみに、この稿本は四福音書が各々全訳されたものである。さらに蔡 2008 では、これとは別にケンブリッジ大学図書館に所蔵される稿本(ケンブリッジ所蔵本)の存在が紹介されている。この稿本は大英所蔵本と同じく四福音書部分がシャッフル抄訳されたものである。また、大英所蔵本をモリソン自身が筆写し中国に携行して、これを傍らに置いて聖書の翻訳を行ったといわれる「モリソン筆写本」が、香港大学図書館に所蔵されている。幸いにして筆者はこれまでにバセに関連する上記の資料を実際に手に取って調査する機会を得たⁱⁱⁱ。先行研究や筆者による各稿本の比較調査から、上記各稿本は目下のところまずは、ローマ本、ケンブリッジ所蔵本、大英所蔵本、そして香港大学所蔵のモリソン筆写本の順に存在したと見るのが妥当であろうと思われる^{iv}。

これより話はさらに遡るが、カソリックによる翻訳活動では、『四史攷編』以前の1600年代なかばにはすでに『聖經直解』など聖書の抄訳も現れており、『聖經直解』と『四史攷編』との翻訳上の継承関係も見逃せない^v。

本稿は、『四史攷編』と先行の『聖經直解』、後続の『神天聖書』との関係について、語彙と文体の特徴から考察を試みるものである^{vi}。『四史攷編』の各稿本のうち調査対象に大英所蔵本を選んだ。これは、モリソンがこれを筆写し直接聖書翻訳の参照としたことによる。また、調査の範囲は紙幅の関係から『四史攷編』の4福音書抄訳(合訳)部分に限った。なお、『四史攷編』の各稿本間の異同の詳細については稿を改めて検討したい。

1. ジャン・バセと『四史攸編』

パリ外国宣教会の宣教師であるジャン・バセ (J. Basset) によって翻訳されたものである。ジャン・バセは1662年フランスのリヨン生まれ、のちにパリ外国宣教会の宣教師として活躍した。司祭に任ぜられたのち1689年末に広東に到着し、広東、福建、浙江、江西の各省で活躍し、1692年には広東の副代牧となった。1702年副代牧として四川に到着し布教をおこなった。その後、1707年に広東で死亡した^{vii}。

矢沢1967によると、バセの経歴とパリ外国宣教会の布教史に関して正確な知識をもつ Launay による伝記から、『四史攸編』は、バセが四川に赴任したのち、つまり18世紀初頭に翻訳されたものと考えられている。また、バセの翻訳した聖書についてパリ外国宣教会文書第434巻508頁の Martiliat の日誌に記述があり、「マタイによる福音書」の第1章から「ヘブル人への手紙」の第1章までを訳したものと記している、とのことである^{viii}。

この『四史攸編』は、さきにふれた『聖經直解』と文体、語彙がかなり類似しており、翻訳に際して参照していた可能性が高い。また、プロテスタント宣教師であるモリソンが中国語による聖書全訳の嚆矢『神天聖書』を翻訳する際に、参考にしたのがカソリックの翻訳本であったことも重要な事実である。というのも、カソリックとプロテスタントはその布教活動に対する考え方の違いから、翻訳活動にはさほど関連性がみられないのではないか、というのが従来の見方であったが、実際には翻訳や用語の方面では明らかに両者のあいだに継承関係が存在したことがうかがえるのである。

2. 『四史攸編』について

まず『四史攸編』の各稿本の概要について、前述の順序に従って紹介しておこう。いずれの稿本も毛筆による。1つめのローマ本は、全7巻一冊、364葉から成り、4福音書の全訳と、「使徒行傳」から「ヘブル人への手紙」第1章までの全訳から成る^{ix}。2つ目のケンブリッジ所蔵本は、4福音書部分のストーリーを1つにまとめた「Harmony」と呼ばれるシャッフル抄訳で、「使徒行傳」以下は若干の文字の異同等を抜きにすれば基本的にローマ本に同じである。なお、この稿本は4福音書部分の第1ページが欠葉で、大英所蔵本を元に加筆されており、同資料補足メモにはその旨明記されている。3つ目の大英所蔵本も、ケンブリッジ所蔵本と同じく4福音書のシャッフル抄訳と「使徒行傳」から「ヘブル人への手紙」第1章までの全訳から成る。管見の限りでは、ケンブリッジ本と若干の語彙の異同はあるものの、内容的にはほぼ同一のものと言ってよいと思われる。なお、所謂『四史攸編』という略称は、この大英所蔵本の4福音書シャッフル抄訳の冒頭にある「四史攸編

『耶穌基利斯督福音之會編』というタイトル書きによるものである。上記3者はいずれも翻訳範囲が4福音書からヘブル人への手紙」第1章までという共通点がある。4つ目の香港大学所蔵本は、この大英所蔵本をモリソンが筆写して中国に携行したというのは前述の通りである^x。

例として、4福音書の同一部分（「マタイによる福音書」の第1章第11節から第15節の部分）を翻訳した部分をそれぞれ挙げてみると、以下の通りである^{xi}。なお、節ごとに筆者がアレンジして排列した。

1) ローマ本

瑪竇攸編耶穌基督聖福音

第一章

- ⑪ 若些乃生熱哥聶及厥弟兄于巴必隆之移
- ⑫ 而巴必隆移後熱哥聶生撒臘疊撒臘疊乃生梭巴伯
- ⑬ 梭巴伯乃生阿必雨阿必雨乃生厄賴心厄賴心乃生阿梭爾
- ⑭ 阿梭爾乃生撒奪撒奪乃生阿京阿京乃生厄呂
- ⑮ 厄呂乃生厄臘撒厄臘撒乃生瑪丹瑪丹乃生雅各

2) ケンブリッジ所蔵本

- ⑪ 若些乃生熱哥聶及厥弟兄于巴必隆之移
- ⑫ 而巴必隆移後熱哥聶生撒臘疊撒臘疊乃生梭巴伯
- ⑬ 梭巴伯乃生阿必雨阿必雨乃生厄賴心厄賴心乃生阿梭爾
- ⑭ 阿梭爾乃生撒奪撒奪乃生阿京阿京乃生厄呂
- ⑮ 厄呂乃生厄臘撒厄臘撒乃生瑪丹瑪丹乃生雅各

3) 大英所蔵本

- ⑪ 若些乃生熱哥聶及厥弟兄于巴必隆之移
- ⑫ 而巴必隆移後熱哥聶生撒臘疊撒臘疊乃生梭巴伯
- ⑬ 梭巴伯乃生阿必雨阿必雨乃生厄賴心厄賴心乃生阿梭爾
- ⑭ 阿梭爾乃生撒奪撒奪乃生阿京阿京乃生厄呂
- ⑮ 厄呂乃生厄臘撒厄臘撒乃生瑪丹瑪丹乃生雅各

ケンブリッジ所蔵本と大英所蔵本は1行あたりの文字数が違うので頁に異同はあるものの、見てのとおり同じ章節を翻訳した該当部分の文字については全く同じである。また参

考までにモリソン訳『神天聖書』、マーシュマン訳『聖經』の該当部分について以下の通り挙げておく。中国大陆で翻訳された『神天聖書』と、インドで翻訳された『聖經』は、いずれも大英所蔵本の筆写本を参照して翻訳したとされる。両者は以下の引用部分の如く全編にわたり本文が酷似しているが、その点については稿を改めて検討したい。

4) 『神天聖書』

聖馬竇傳福音書卷一

第一章

- ⑪ 又若西亞生耶可尼亞及厥弟兄們大約被移往巴比倫之時
- ⑫ 移往巴比倫之後耶可尼亞生撒拉氏以撒拉氏以生沙羅巴比
- ⑬ 又沙羅巴比生亞比五得亞比五得生以來亞堅以來亞堅生亞所耳
- ⑭ 又亞所耳生颯多革颯多革生亞其麥亞其麥生以來五得
- ⑮ 又以來五得生以利亞撒耳以利亞撒耳生馬但馬但生牙可百

5) 『聖經』

使徒馬竇傳福音書

第一章

- ⑪ 若西亞生耶可尼亞並厥弟兄大約伊等被徙去巴比倫時也
- ⑫ 徙去巴比倫之後耶可尼亞生撒拉氏以勒撒拉氏以勒生沙羅巴比
- ⑬ 沙羅巴比生亞比五得亞比五得生以來亞堅以來亞堅生亞所耳
- ⑭ 亞所耳生颯多革颯多革生亞其麥亞其麥生以來五得
- ⑮ 以來五得生以利亞撒耳以利亞撒耳生馬但馬但生牙可百

3. 大英所蔵本の構成について

本稿では、このうちモリソンが直接参照した大英所蔵本を例に見ていきたい。1行は基本的には24字、ところどころ文字が書き加えられたところや、詰めて書かれた行があり最大31字である。各葉表裏にそれぞれ6行ある。前半の「四史攸編耶穌基利斯督福音之會編」は、全155葉で第1葉が白紙、第2葉表が最初のページとなっているので、第2葉表から最後の第155葉表まで307頁ということになる。それに対して、後半は「使徒行傳」の155葉裏から229葉裏までと、「ローマ書」の230葉表から378葉表までを合わせて全446頁で、ほぼ全文が翻訳されている。

まず「四史攸編耶穌基利斯督福音之會編」は全28章で、4福音書のいろいろな部分を

集めて1つのストーリーに再構成したものである。なかにはマタイ5章から7章のように連続して各章の全文が翻訳されている部分もあるが、基本的には小さな部分をつないで出来上がっている。例えば、第1章はルカ1章1～4文、ヨハネ1章1～13文、ルカ1章5～56文、マタイ1章18～24文の4つの部分で構成されているが、第28章は実に21の小さな部分、すなわちマタイ27章、ルカ23章、ルカ24章、マルコ16章、マタイ28章、ルカ24章、マタイ28章、ヨハネ20章、ルカ24章、ヨハネ20章、ルカ24章、ヨハネ20章、ルカ24章、ヨハネ20章、ヨハネ21章、マタイ21章、ルカ24章、マルコ16章、マタイ28章、ルカ24章、ヨハネ21章から構成されている。

具体例として、第26章の一部分を抜粋してしてみよう。136葉裏2行目から137葉表2行目まで約1ページの6行に、「マタイ26章、ルカ22章、ヨハネ18章、マタイ26章、マルコ14章」というふうに、4福音書の5つの部分が繋ぎ合わされている。

爾憶余弗能求吾父而立與我天軍十二陣餘乎則經所載宜有是事何得驗乎瑪竇二十六章
乃曰汝曹任至此即撫耳而愈之且向鐸德諸宗殿官吏與老長來尋之者曰爾等以刀以棍
如來捕賊我在于殿汝間未下手捉我然此乃爾等之時乃黑暗之能路加二十二章群兵及將
與如達役偕擒耶穌而縛之若望十八章時徒皆遭之而逃矣瑪竇二十六章有一幼童以布被
遮赤身而隨耶穌眾卒捉之其遺布而赤逃避之馬耳谷十四章

一方、4福音書の側から見た場合どれだけの部分が翻訳されているのか、マタイの福音書を例にとると以下ようになる。() 内の数字は各章の文の数で、右に示した番号はそれぞれ翻訳されている文の番号、そのうち下線をひいたものは文の一部分のみ翻訳されているものである。

- 第1章 (全25文) 1～17, 18, 19～24, 25
- 第2章 (全23文) 全文
- 第3章 (全17文) 4～17
- 第4章 (全25文) 12～16, 23～25
- 第5章 (全48文) 全文
- 第6章 (全34文) 全文
- 第7章 (全29文) 全文
- 第8章 (全34文) 1, 2～4, 11, 12, 14～17, 23～34
- 第9章 (全38文) 9～34, 36～38
- 第10章 (全42文) 全文

- 第11章 (全30文) 1, 20~24, 28~30
第12章 (全50文) 9~50
第13章 (全58文) 1~8, 10~15, 18~38, 39, 41~53, 54
第14章 (全36文) 3~11, 28~31, 32, 34
第15章 (全39文) 全文
第16章 (全28文) 5~28
第17章 (全27文) 全文
第18章 (全35文) 1~7, 10~35
第19章 (全30文) 1, 3~30
第20章 (全34文) 1~16, 20~28
第21章 (全46文) 1, 2~11, 14~16, 21~46
第22章 (全45文) 1~14, 16~34, 41, 42~45
第23章 (全39文) 1~10, 13~19, 20, 21, 22~35
第24章 (全51文) 翻訳なし
第25章 (全46文) 1~13, 31~46
第26章 (全75文) 48, 49, 50, 53, 54, 56, 65~69, 72~75
第27章 (全66文) 1~10, 15~17, 19, 20, 21, 22, 24, 25, 45, 46, 51~55, 62~66
第28章 (全20文) 2~4, 11, 12~20

第2章, 第5章, 第6章, 第7章, 第10章, 第15章, 第17章で全文が翻訳されている一方で, 第24章は章全体がすっぽり抜け落ちている。「マタイの福音書」全体を通してみると, 全1070文のうち翻訳されているのが706文で66%, 翻訳されていないのは364文で34%である。このほか, 「マルコの福音書」では全678文のうち翻訳されているのが121文で18%, 翻訳されていないのが557文で82%, 「ルカの福音書」では全1151文のうち翻訳されているのが611文で53%, 翻訳されていないのが540文で47%, 「ヨハネの福音書」では全879文のうち翻訳されているのが836文で95%, 翻訳されていないのが43文で5%であった。全体としては, 全3778文のうち翻訳されているのが2274文で60%, 翻訳されていないのが1504文で40%となった。『四史攷編』『四史攷編耶穌基利斯督福音之會編』では, ざっとみて4福音書の約6割の内容を再構成したものであることが分かる。

4. ラテン語ブルガタ訳聖書と『聖經直解』と『四史攷編』

前述のように、『聖經直解』は、ディアスが、トリエント公会議で公認聖書となったラテン語ブルガタ訳聖書を底本として、4福音書を中国語に抄訳したものである。『四史攷編』も翻訳者のバセがブルガタ訳聖書を底本としていることは、先行研究によって既に指摘されている。同じくラテン語ブルガタ訳聖書を底本とする両者について、「マタイの福音書」第8章の一部分を例に、どのように中国語に翻訳されているのか、それぞれ本文を比較対照してみよう。なお、表中ではラテン語ブルガタ訳聖書を【ブ】、『聖經直解』を【直】、以下は所謂『四史攷編』で、ローマ・カサナテンス図書館所蔵本を【羅】、ケンブリッジ大学図書館所蔵本を【剣】、大英図書館所蔵本をその表題から【四】とした。

まず「マタイの福音書」8章2節を見てみよう。

【ブ】 et ecce leprosus veniens adorabat eum, dicens: Domine, si vis,
見よ 癩病人 来る ひれ伏す 彼に 曰く 主よ つもりがある
potes me mundare.^{xii}

する 私を 浄める

【直】 一癩者伏曰主若肯輒克淨予

【羅】 忽有一癩就之伏拜曰主若爾肯即能淨余

【剣】 忽有一癩就之伏拜曰主若爾肯即能淨余

【四】 忽有一癩就之伏拜曰主若爾肯即能淨余

ブルガタ訳のうち、“et ecce (見よ)” “eum (彼に)” “veniens (来る)” などが省略されているので、完全な逐語訳とは言えないものの、“leprosus = 癩者”, “adorabat = 伏”, “曰 = dicens”, “Domine = 主”, “mundare = 克淨”, “me = 予” など、ほぼ原文の意味するところを中国語の文言に忠実に翻訳していることがわかる。

つぎに「マタイの福音書」8章3節を見てみよう。

【ブ】 Et extendens: Jesus manum, tetigit eum, dicens: Volo. Mundare. Et
伸ばす イエス 触る 彼に 曰く 吾欲す 清める
confestim mundata est lepra ejus.^{xiii}

速く 清める 癩病その人

【直】 耶穌舒手撫之曰肯淨矣迺厥體遽淨

【羅】耶穌即舒手撫之日余肯汝淨矣且立刻其癩已淨

【劍】耶穌即舒手撫之日余肯汝淨矣且立刻其癩已淨

【四】耶穌即舒手撫之日余肯汝淨矣且立刻其癩已淨

本節では、ブルガタ訳のうち“Jesus = 耶穌”，“extendens = 舒手”，“tetigit = 撫”，“eum = 之”，“dicens = 曰”，“Volo = 肯”，“Mundare = 淨”，“遽 = confestim”などは、ほぼ原文の意味するところが中国語の文言に翻訳されている。“lepra ejus（癩病人そのひと）”については、前節までに癩病人がすでに登場しているので、3人称属格の“厥”によって、“厥體（その身体）”と訳されている。このほか、文末助詞の“～矣”と副詞の“迺”が補われている。

上記2例を含めて、『聖經直解』と『四史攷編』がともに4福音書の各節の全文を翻訳している章節の一部について、異同を明確にしたものを列举しておく。なお、以下の引用文中の「□」は他書の同一箇所の変換に対して当該本に該当する文字が無いところを空白にしたものである。

マタイ第8章第2節^{xiv}

【直】□□一癩者□□伏□□曰主若□肯輒克淨予

【羅】忽有一癩□就之伏拜曰主若爾肯即能淨余

【劍】忽有一癩□就之伏拜曰主若爾肯即能淨余

【四】忽有一癩□就之伏拜曰主若爾肯即能淨余

同 第8章第3節^{xv}

【直】耶穌□舒手撫之日□肯□淨矣迺□□厥體遽淨

【羅】耶穌即舒手撫之日余肯汝淨矣且立刻其癩已淨

【劍】耶穌即舒手撫之日余肯汝淨矣且立刻其癩已淨

【四】耶穌即舒手撫之日余肯汝淨矣且立刻其癩已淨

同 第8章第4節^{xvi}

【直】耶穌語之曰□□勿洩□□惟之撒責且獻禮遵每瑟所命□□于癩者以證厥病愈

【羅】耶穌謂之□慎毋告人知惟詣鐸德前示身獻每瑟所命之禮使伊等得証□□□

【劍】耶穌謂之□慎毋告人知惟詣鐸德前示身獻每瑟所命之禮使伊等得証□□□

【四】耶穌謂之□慎毋告人知惟詣鐸德前示身獻每瑟所命之禮使伊等得証□□□

同 第8章11節^{xvii}

【直】並語爾□自東自西有多□人來同亞巴浪義撒雅各宴於天堂

【羅】且語爾等自東自西將來者必多同阿巴郎依撒雅各席于天國

【劍】且語爾□自東自西將來□必多同阿巴郎依撒雅各席于天國

【四】且語爾□自東自西將來□必多同阿巴郎依撒雅各席于天國

同 第8章12節^{xviii}

【直】上國之子見□投於外閭冥即有涕泣有切齒□所□

【羅】而國之子將被逐于外閭□□□涕泣□切齒之所也

【劍】而國之子將□投于外閭□□□涕泣□切齒之所也

【四】而國之子將□投于外閭□□□涕泣□切齒之所也

ルカ 第2章第43節^{xix}

【直】禮日既闋伊等行返乃童耶穌自止日路撒冷□厥親弗知

【羅】禮日既闋伊等行返乃童耶穌□止柔撒冷□而厥親弗知

【劍】禮日既闋伊等行返乃童耶穌□止柔撒冷□而厥親弗知

【四】禮日既闋伊等行返乃童耶穌□上柔撒冷□而厥親弗知

同 第2章第44節^{xx}

【直】度在群行□行及□□□程乃訪求於親族□知識

【羅】度在群行中□□一日之程乃訪求于親族于相知

【劍】度在群□中行□一日之程乃訪求于親族于相知

【四】度在群□中行□一日之程乃訪求于親族于相知

同 第2章第45節^{xxi}

【直】不獲復返日路撒冷覓之

【羅】不獲復返柔撒冷□覓之

【劍】不獲復返柔撒冷□覓之

【四】不獲復返柔撒冷□覓之

ここでも、両者の本文が概ね一致している。一致していないものについても、語句や一部の表現は異なるものの基本的な構文は一致していることが多かった。両者には同じくラテン語ブルガタ訳聖書を底本としていたという共通点があるだけでなく、『四史攷編』が先行の『聖經直解』を参照したという直接の継承関係があったかも知れない、ということが指摘できよう。

ちなみにルカ第2章第43節「エルサレムにとどまる」の部分の動詞が【直】では「止」であったのが、【四】では恐らく書き損じで「上」になっている。【剣】は全体としては【四】と同じであるが、動詞が【直】と同じく「止」を用いているのは、ケンブリッジ所蔵本が大英所蔵本に先行するという一つの証左になるのではないか。

一方で、『聖經直解』の本文が『四史攷編』にそれほど、或いは全く踏襲されていない節も若干数あるので紹介しておく。

ルカ 第2章35節^{xxii}

【直】 爰有利刃創爾靈時人攸藏意輒隨發露

【羅】 即爾魂將被劍刺庶幾多心之念露著矣

【剣】 即爾魂將被劍刺庶幾多心之念露著矣

【四】 即爾魂將被劍刺庶幾多心之念露著矣

同 第2章第36節^{xxiii}

【直】 亦有亞納先知者法努陀爾暨亞色爾宗枝之女年□□老厥婚七年

【羅】 當時阿瑟支有先知女名亞納係範月耳□之女年已甚老出閨七年

【剣】 當時阿瑟支有先知女名亞納係範月耳□之女年已甚老出閨七年

【四】 當時阿瑟支有先知女名亞納係範月耳□之女年已甚老出閨七年

このような例外が若干数あるものの、全体を通していても、構文（文体）が完全に異なるものはごく一部である。4福音書の翻訳部分が一致している個所ではほとんどの節で、『聖經直解』と『四史攷編』の本文がかなりの程度で一致している。このことから、両者に全く関わりが無かったと見るよりも、『四史攷編』のローマ本が翻訳される際に何らかの形で『聖經直解』の中国語が参照され、そこから本文がシャッフルされたケンブリッジ本が成立し、大英所蔵本へと順次筆写されて行った、と見るのが自然であろう。

5. 『神天聖書』及び『聖經』への継承

中国におけるキリスト教布教の歴史は、ふつう第1期：唐代から元代にかけての景教、元代におけるフランシスコ会まで、第2期：1579年イエズス会から1844年黄浦条約まで、第3期：黄浦条約以降、の3つの大きな時期に分けることができる^{xxiv}。聖書の中国語訳は景教の時代から行われていたが、本格的な聖書の全訳は、第3期まで待たねばならない。また、中国語訳聖書の翻訳史は、(1) 漢文訳期 (2) 文理訳期 (3) 浅文理訳期 (4) 国語訳期 (5) 方言訳期、の5つに分けられる^{xxv}。『四史攷編』と『神天聖書』『聖經』の文体については、塩山 2000 でも指摘したように語彙や文体からみて「文理」と呼ぶのが妥当か否かは疑問であるが、時期的にはともに (2) 文理訳期に位置づけることができる。

前述のとおり、18世紀初頭、パリ外国宣教会の宣教師バセ (Basset, J, 中国名：白日昇, 白日陞, 巴設) が4つの福音書と使徒行傳からパウロの書簡までを翻訳したものが『四史攷編』と呼ばれる稿本である^{xxvi}。大英博物館所蔵番号 Sloane 3599 の漢訳『新約聖書』がそのバセの翻訳によるものである。この稿本は広州のインド会社の職員がロンドンに持ち帰り Sloane 卿に贈ったもので、のちに同卿から博物館に寄贈されたものである^{xxvii}。

中国における最初の中国語による全訳聖書は、1823年ロバート・モリソンの『神天聖書』であるが、モリソンは Sloane 卿が大英博物館に寄贈したこの稿本を借りて、彼の中国語教師であった当時ロンドンに英語を学びに来ていた広東の青年容三徳について研究を進めながら筆写した^{xxviii}。モリソンは1807年広州に到着後、すぐに聖書の翻訳をはじめ、大英所蔵本の筆写本を底本とした。この稿本の筆写は一部分は彼自身によって、一部分はロンドン在住のある中国人によって行われた。その後、モリソンはロンドン会に宛てた書簡のなかで「私は大英博物館所蔵の漢訳『新約聖書』Sloane 写本を書写し、これは私が漢訳『聖書』を翻訳・編集するうえでの基礎となった」とも述べている^{xxix}。

さて、『四史攷編』はラテン語ブルガタ訳を底本にしている^(xxx)。モリソンの『神天聖書』(1813-1823) はギリシャ語訳、マーシュマンの『聖經』(1815-1822) もおそらくはギリシャ語訳に依拠しているが、両者とも『四史攷編』を大いに参照していることはこれまでの研究でも指摘されているし、3者の本文をならべて比較してみたときにも十分実感できる。「使徒行傳」及び「ローマ書」から「ヘブル人への手紙」第1章まではほぼ全訳されていて、『神天聖書』『聖經』ともにかなりの割合で『四史攷編』を参考にして翻訳しており、骨格はほぼ踏襲していると言える。しかし語彙の面では音訳語を中心かなりの異同がある。

では、実際に翻訳された中国語について見ていくことにする。まずは、『四史攷編』でも全訳され、『神天聖書』『聖經』がもとにした「使徒行傳」の冒頭、第1章の最初の2文(1～2文)を対照してみよう。囲みの部分は固有名詞で、いずれか1つでも異同がある場

合にはそれぞれ下線を引いた。なお、以下に引用した本文中の「□」は第4節で述べたとおり該当する文字が無い箇所を空白にしたことを示すものである。

- 【四】陡斐勒□余先言耶穌始行訓諸情至于以聖風囑□所選之使徒□而被取升天之日
【神】弟阿非羅乎余先言耶穌始行訓諸情至于以聖風囑其所選之使徒後而被取上去之日
【聖】弟亞非羅乎吾先講耶穌始行誨諸情迄□以聖風命其所選之使徒□而□□升天之日

テオピオよ。私は前の書で、イエスが行い始め、教え始められたすべてのことについて書き、お選びになった使徒たちに聖霊たちによって命じてから、天に上げられた日のことにまで及びました。（『聖書』1973 日本聖書刊行会）

この部分でいずれかが異なっているのは「□、乎、乎」「余、余、吾」「言、言、講」「訓、訓、誨」「至于、至于、迄」「囑、囑、命」「□、其、其」「□、後、□」「被、被、□」「取升天、取上去、升天」の10箇所あるが、全く同じ文体のなかで若干の語彙を置き換えているということである。また例えば次の「使徒行傳」第2章7文の例のように、大筋では変わらないものの、『神天聖書』が『四史攸編』に若干の語彙を補って文意をより分かりやすくした箇所も数多く見られる。

- 【四】眾□驚□駭□曰此□□非皆加里辣人乎
【神】眾大驚奇駭相曰此□豈非皆加利利人乎
【聖】眾□驚□愕□曰此輩豈非□加利亞人乎

彼らは驚き怪しんで言った。「どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガラヤの人ではありませんか。」（『聖書』1973 日本聖書刊行会）

つぎに『四史攸編』『四史攸編耶穌基利斯督福音之會編』（4つの福音書合訳を改編した部分）について見てみよう。

「馬竇」第2章1文

- 【四】耶穌既生于如達白冷黑洛特王時即有數瑪日自東方來柔撒冷
【神】夫耶穌生於如氏亞之畢利恆後至王希羅得之時卻有或嗎咂自東邊來至耶路撒冷
【聖】夫耶穌生於如氏亞之畢利恆後於希羅得王之時卻有□哲人從東方來至耶路撒冷

イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、
東方の博士たちがエルサレムにやって来て、
(『聖書』1973 日本聖書刊行会)

こちらのほうは、『神天聖書』『聖經』がさほど忠実に『四史攸編』を踏襲していないが、
『神天聖書』『聖經』の両者は異同が「至王希羅得、於希羅得王」「或、□」「嗎咍、哲人」
「自、從」「東邊、東方」と少ない。いずれの聖書も、『四史攸編』の本文を底本としつつ、
かなりの程度でどちらかがもう一方を参照した可能性があることがうかがえるのである^(xxxi)。
『神天聖書』及び『聖經』の翻訳の詳細については、稿を改めてひきつづき検討したい。

注

- i 新教传教士在中国大陆开始圣经的汉译工作是在19世纪初期开始的，其中以马礼逊的《神天圣书》为嚆矢。同一时期，马士曼在印度也完成了《圣经》的汉译工作。据说，马礼逊和马士曼的这两本汉译圣经都参考一部一百年以前就有的一本汉译圣经稿本，亦即由法国传教士白日陞翻译的所谓《四史攸编》。关于《四史攸编》，以前除了大英图书馆所藏本（大英本）以外，人们都不知道其他稿本的存在。但是，最近随着学术研究的发展，人们接连发现了两部比大英本更早的不同的稿本，一部在罗马的旧教图书馆（罗马本），另一本在英国剑桥大学图书馆（剑桥本）。这次，笔者获得机会，亲眼看到了这三部稿本，考察了这三者之间翻译上的异同。《四史攸编》以前，在17世纪的旧教还有一部圣经部分汉译本叫《圣经直解》。本文通过对《圣经直解》和《四史攸编》三种稿本中汉译文的特征分析，就新教传教士（尤其是《神天圣书》和《圣经》）以前的汉译圣经的传承关系提出一个预测。
- ii 方豪，徐宗澤らの目録には賀清泰の『古新聖經』が挙げられているが、現在に至るもその所在，詳細が明らかになっていない。
- iii 但し，香港大学所蔵本については，原本の閲覧が許可されなかったため，公式複写本を閲覧した。
- iv ローマ本については，内田 2010 を参照した。ケンブリッジ所蔵本については，蔡錦圖 2008 を参照した。蔡錦圖 2008 によると，モリソン筆写本からさらに筆写されたものがケンブリッジ大学図書館に所蔵されているとのことであるが，筆者はまだ目にする機会を得ていない。また，香港大学の宋剛氏もカソリックの聖書翻訳に関連して，バセによる手稿本について言及している。なお，これらの稿本の成立順（ローマ本，ケンブリッジ本，）については，内田慶市，張西平，宋剛の各氏も筆者と概ね見方が一致している。
- v 『聖經直解』の中国語訳の詳細については塩山 2008 を参照。
- vi 本節では聖書本文の資料として大英図書館所蔵『四史攸編』『神天聖書』，フランス国立図書館所蔵『聖經』のマイクロコピーを使用した。
- vii 費頼之 1932-1934『在華耶穌會士列伝及書目』及び矢沢 1967 参照。
- viii 矢沢 1967 参照。また，Martiliat の日誌の，「マタイによる福音書」の第1章から「ヘブル人への手紙」の第1章までを訳したものだ，との記述は，ローマ本の内容構成と一致しており，ローマ本が一

近代の中国語訳聖書の系譜に関する覚書き

連の稿本の中で最初のものである、という仮説の一つの根拠である。

- ix 内田 2010 を参照。
- x 香港大学所蔵本については、筆者は前半部分しか目にしていないので、その筆写の範囲については今後の調査を待ちたい。
- xi ケンブリッジ所蔵本を除いては、内田 2010 の例示に倣った。
- xii この節の英語訳（ブルガタ対訳より）は以下の通りである。“And behold a leper came and adored him saying, Lord, if thou wilt, thou canst make me clean.”
- xiii この節の英語訳（ブルガタ対訳より）は以下の通りである。“And Jesus stretching forth his hand, touched him, saying, I will: be thou made clean. And forth with, his leprosy was made clean.”
- xiv この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“et ecce leprosus veniens adorabat eum, dicens: Domine, si vis, potes me mundare.”
【英】“And behold a leper came and adored him saying, Lord, if thou wilt, thou canst make me clean.”
- xv この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“Et extendens: Jesus manum, tetigit eum, dicens: Volo. Mundare. Et confestim mundata est lepra ejus.”
【英】“And Jesus stretching forth his hand, touched him, saying, I will: be thou made clean. And forth with, his leprosy was made clean.”
- xvi この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“Et ait illi Jesus: Vide, nemini dixeris: sed vade, ostende te sacerdoti, et offer munus, quod praecepit Moyses, in testimonium illis.”
【英】“And Jesus saith to him, See thou tell nobody: but go, shew thyself to the priest, and offer the gift which Moses commanded for a testimony to them.”
- xvii この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“Dico autem vobis, quod multi ab Oriente et Occidente venient, et recumbent cum Abraham, et Issac, et Jacob in regno coelorum.”
【英】“And I say to you, That many shall come from the East and west, and shall sit down with Abraham and Issac and Jacob in the kingdom of heaven.”
- xviii この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“filii autem regni ejicientur in tenebras exteriores: ibi erit fletus, et stridor dentium.”
【英】“but the children of the kingdom shall be cast out into the exterior darkness: there shall be weeping and gnashing of teeth.”
- xix この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“consummatisque diebus, cum redirent, remansit puer Jesus in Jerusalem, et non cognoverunt parentes ejus.”
【英】“and having ended the days, when they returned, the child Jesus remained in Jerusalem: and his parents knew it not.”
- xx この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
【ブ】“Existimantes autem illum esse in comitatu, venerunt iter diei, et requirebant eum inter cognates, et notos.”

- 【英】“And thinking that he was in the company, they came a day’s journey, and sought him among their kinsfolk and acquaintance.”
- xxi この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
- 【ブ】“Et non invenientes, regressi sunt in Jerusalem, requirentes eum.”
- 【英】“And not finding him, they returned into Jerusalem, seeking him.”
- xxii この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
- 【ブ】“et tuam ipsius animam pertransibit gladius, ut revelentur ex multis cordibus cogitationes.”
- 【英】“and thine own soul shall a sword pierce, that out of many hearts cogitationes may be revealed.”
- xxiii この節のブルガタ訳とその英語対訳は以下の通りである。
- 【ブ】Et erat Anna prophetissa, filia Phanuel, de tribu Aser: haec processerat in diebus multis, et vixerat cum viro suo annis septem a virginitate sua.
- 【英】And there was Anne a prophetess, the daughter of Phanuel, of the tribe of Aser; she was far stricken in days, and had lived with her husband seven years from her virginity.
- xxiv 竹中 1990 参照。
- xxv 志賀 1973 参照。
- xxvi 多くの中国語文獻では「巴設」が採用されている。
- xxvii A.J. Garnier 1933 *Chinese Version of the Bible* による。また、顧長声 1981《传教士与近代中国》にもほぼ同じく「十八世紀初年、巴黎外方传教会的传教士巴设曾翻译四福音书、使徒行传和保罗书信。英国伦敦大不列颠博物馆所藏编号为史隆三五九九号的汉译部分《新约》，可能是巴设所译。这批译稿是由在广州的东印度公司职员带到伦敦赠送给汉斯・史隆爵士的，后来由他捐献给博物馆收藏。」とある。
- xxviii 譚樹林 2003 に詳しい。また、吉田 1997, p35でも「モリソンはイギリスにおいて中国伝道の準備を進めている時、たまたま大英博物館に保管されていたカトリック系のパリ外国宣教会（仏称略）所属の宣教師バセー Basset, J の中国語訳聖書の稿本である『四史攸編』を見ることができ、彼の中国語の教師である董三託の協力を得てこれを写しとった。」と指摘されている。
- xxix 譚樹林 2000 および Eliza. Morrison 1839 参照。
- (xxx) ローマ・カトリックではトリエント公会議においてブルガタ訳（ウルガタとも：筆者注）が公認聖書として認められて以来、カトリック各派ではいずれもこれを採用している。
- (xxxi) 吉田 1997, p37では『四史攸編』とモリソン訳聖書の原文を対比して見ると、モリソン訳は用語において『四史攸編』を参照していること、また聖書の原文に極めて忠実な逐語訳を試みていることが看取される」としているが、本稿の調査（途中経過）を通して見る限り、『四史攸編』の参照については、「使徒行傳」以下の全訳部分は文体も含めてかなりの程度で参照している。しかし合訳の「四史攸編耶穌基利斯督福音之會編」部分についてはさほど忠実に参照しておらず、分けて考える必要がある。

<主要参考文献>

- 内田慶市 2010 「モリソンが元にした漢訳聖書—新しく発見されたジャン・バセ訳新約聖書稿本—」『アジア文化交流研究』第5号 219-230 関西大学アジア文化交流研究センター

近代の中国語訳聖書の系譜に関する覚書き

- 顧長声 1981『传教士与近代中国』上海人民出版社
- 蔡錦圖 2008「白日陞の中文聖經抄本—及其對早期新教中文譯經的影響—」『華神期刊』創刊号 50-77
中華福音神學院
- 塩山正純 2000「モリソン訳『神天聖書』について—その新約部分とくに「使徒行傳」のことばを中心に—」『或問』第1号 53-67 東西言語文化接触研究会
- 塩山正純 2008「カソリックによる聖書抄訳—ディアスの『聖經直解』—」『文明21』57-78 愛知大学
国際コミュニケーション学会
- 志賀正年 1973『中文訳聖書（Bible）の基礎的研究』天理時報社
- 竹中 1990「漢訳聖書『聖經直解』『四史攸編』について」『人文論集』29号 早稲田大学法学会
- 譚樹林 2003「近代中文『聖經』翻譯史上的“二馬訳本”」『煙台師範学院学報（哲学社会科学版）』第20
卷 第4期
- 矢沢利彦 1967「最初の漢訳聖書について」『近代中国研究センター彙報』第9号 1-7 近代中国研究セ
ンター
- 吉田寅 1997『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院
- Garnier, A.J. 1933 *Chinese Version of the Bible*
- Morrison, Eliza. 1839 *Memoirs of the life and Labours of Robert Morrison, Compiled by his Widow*